

「伊達市愛宕山古墳の環頭単龍大刀について」

～環頭大刀・土師器・須恵器の検討を通して～

伊達市保原歴史文化資料館

高橋 信一

1. はじめに

伊達市保原歴史文化資料館では、令和2年度第1回企画展として6月13日（土）～9月22日（火）日まで「ふくしま盆地北東辺の王者たち～伊達市の古墳～」を開催した。この企画展は、福島盆地における古墳の動態と集落の在り方、地域有力者の動向を分析し、福島市・国見町・桑折町の古墳からの出土品を展示する予定であった。しかし、コロナ蔓延防止のため、他地域からの借用を断念し、伊達市内の古墳および出土品に限定した企画展となった。

この際、伊達市愛宕山（山神）古墳出土¹⁾の金銅製単龍環頭大刀及び出土品を観察する機会に恵まれた。環頭大刀の観察、土師器や須恵器の接合・復元作業を試み、さらに図上において復元図化を行った。これら出土品の観察及び検討から、新しい知見が得られたので、この古墳の年代について再検討していく。また、金銅製単龍環頭大刀の実測図は、馬目・穴沢氏の『福島考古 第27号』を使用し、細部について補足した。写真図版は伊達市教育委員会の保管する調査当時のリバーサルフィルムを、また環頭大刀の細部写真は、大谷晃二氏・筆者が撮影したものをを使用した。

2. 伊達市愛宕山古墳1号墳

(1) 調査の経緯

この古墳は、昭和40年代に盗掘され、その際に金銅製単龍環頭大刀1振が発見され、当時の保原中央公民館に保管されていた²⁾。保原町史編纂事業³⁾の一環として、1号墳の発掘調査が昭和54（1979）年3月17日から3月26日まで行われた。調査の結果としては、昭和55（1980）年3月刊行の『土橋古墳群発掘調査報告書』にまとめられている。

(2) 概要

伊達市保原町柱沢字愛宕山に所在し、阿武隈急行保原駅から南東へ2.5kmの地点に位置する。旧梁川町新山古墳から続く、福島盆地西部を見下ろせる標高150m前後の山地性丘陵上に立地している。図1のように調査時には1～3号墳が土橋古墳群として登録されていたが、後に1号墳が小字名や立地の特色から「愛宕山古墳」として登録された。つまり、愛宕山古墳の立地は土橋古墳群を見下ろすような立地に特色がある。

古墳は、丘陵尾根線上から西斜面の部分に営まれた円墳である。墳丘は、丘陵西傾斜面上に立地し、古墳の存在が知られる程度の高まりを有していた。墳丘中央部に深く掘り込まれた盗掘口や、その東と西側の墳丘の高さに落差が確認され、かなり形状を異にしていることから、攪乱が著しいことが観察された。また、微形地を観察すると、尾根先端には自然の高まりがあり、この高まりに寄り添うように古墳が立地している。

図2は、「伊達市都市計画」(No.40・41 1/25000)をもとに、現地にて古墳を

確認し、図中に表示した。なお、都市計画図と報告時の標高については20～30mの誤差があり、再度標高点の測量が必要となった。本文では報告時の標高を表示している。

(3) 墳丘

1号墳は、山地性丘陵尾根線からやや西側に張り出した標高150m前後に立地する。墳丘は、小さな高まりで、かろうじて古墳の形状が確認される程度であった。墳丘の中央部には、深く掘り込まれた盗掘口が確認され、石室に使用された礫が散乱していた。

そこで、表土は腐植土で覆われているため、盛土を検出する目的と周溝の存在を確認するために、東・北・西側にトレンチを設定して調査を開始し、その後に調査区を墳丘全域に拡大して行った。

現況での形状は、東西約12.5m・南北約13.5m・高さ約1.5mを測り、円墳状を呈していた。

(4) 周溝

周溝は、墳丘の東・北・西側に半円状に確認された。周溝の幅は、1.0～1.4m、深さ20～30cmを測り、断面は「U」字形を呈する。周溝外側の調査したところ周溝北側に長方形の張り出しが検出された。周溝外縁部から北側に約1.1m張り出している。写真で観察すると、楕円形を呈し、周溝と同一時期なのかは不明な点もある。この張り出しから須恵器甕・大甕・不明品の小片が202点出土している。

周溝内堆積土は、2層に分かれ、上層が腐植土を含む暗褐色砂質土、下層が地山粒を含む明褐色砂質土となる。また、堆積土から土師器杯・甕の小片が21点出土している。

墳丘の南側は緩斜面のため、周溝は流失したと推定される。

(5) 石室

本古墳の内部主体は、横穴式石室である。盗掘のため、石室上部・天井石・側壁の一部がすでに破壊されていた。天井石に使用したとみられる巨石は全く確認されなかった。聞き取り調査では、盗掘前後に石室に使用していた側壁の石は隣接する人家の側溝石等に再利用されていた。

調査の結果、南へ開口する石室で玄門部門柱石を持たない無袖の形態を呈する。平面形は長方形に近い。石室は、玄室→玄門→羨道→羨門の構造である。玄室の奥行は、奥壁から柵石（玄門底面の区画石）後端まで2.38mである。幅は奥壁部で1.07m、中央部で1.3m、玄室入口部で1.2mを測る。平面形は長方形を呈するが、西壁の線は玄室入口部から奥壁までほぼ直線的であるのに対し、東壁は、奥壁手前の石組みだけ斜めに据えているため、奥壁と垂直にはならず、約20cm内側に入って奥壁と接している。

奥壁は、残存高が65cmで、長さ25～35cm大の石を積み上げているが、中央部分の石は抜き取られており、検出されなかった。また、石室内の堆積土掘り込み中に奥壁に接して長さ1.1m、幅55cm、厚さ55cmの長方形の石が発見された。この石は、盗掘された際に転落したもので、奥壁の上部に積み上げられていたものと推定される。

側壁は、両側壁とも上部石積が完全に取り去られており、現存高は西壁で約70cm、東壁で約50cmである。西壁玄門入口付近が最も石積の残存が悪く、最下段の石だけがかろうじて位置を保っているだけであった。裏込め部分の石も深くまで取り去られ

ており、おそらく盗掘の際にこの部分から玄室へ侵入したものと思われる。両側壁とも裏込め石を検出しており、外側に比較的大型の石を置き、内側に15～20cm大の小型の石が詰め込まれている。壁面に使用している石は、両壁とも最下段に、殆どは長さ50cm前後の比較的長い扁平な石を使用しているが、長さ30cm前後のものもある。その上に、さらに厚みのある石や長さ30cm前後の石を小口積みにして構築されている。東壁の中央より奥壁までの部分が、最も遺存状態が良好である。

玄室の床面は、ほぼ水平である。床面には厚さ2cm程度の平坦な板石が両壁に敷かれていたが、本来は全体に敷かれていたものと推定され、盗掘の際に東壁奥部は取りだされたものであろうか。

玄室と羨道との区別は、床面に据えられた榦石と考えられる石の存在から推定される。玄門底面の榦石は比較的大きい石を利用しており、石室側の面が平坦に切られた切石を用いている。右側には長さ35cm程の小型の石を配置している。

羨道部は、前方端部が明瞭でないが、東壁2.4m、西壁2.6m、幅が榦石手前で1.0m、前端で1.0m前後を測る。残存する石積みの高さは東壁で約75cm、東壁では僅かに30cm程度である。東壁は、玄室入口部付近が残り具合が良く、前方に進むにつれて石積みの高さを減じている。玄室同様、下部に比較的大型の石を用いており、上部は小型の石を内側に向けて積み上げている。また、西壁は床面部分の石積みだけが僅かに残存しており、上部は崩れて不明である。羨道部の南先端は、両側壁に括れが観察され、羨門と推定した。

石室に使用されている石は、通称「御影石」と呼ばれた花崗岩で、周辺の丘陵表面に露呈している花崗岩と同じものである。

盗掘口の壁面を精査した結果、東側と奥壁部分で石室の掘り方を確認することができた。裏込め石は不規則的に積まれているが、奥壁部分の裏込めは確認されなかった。調査した結果、盛土とは明らかに区別できる硬質の積み土が認められ、奥壁部分の裏込めとして利用されたものと考えられる。

(6) 遺物

種別・出土地点

遺物は、調査区内より縄文土器・土師器・須恵器・土師質土器・鉄製品が出土している。他に炭化物が採集されている。分類・接合及び復元作業により、29点を図示した。出土地点及び出土位置について、表1・図5に整理した。

内訳は、土師器杯2点・土師質土器杯2点・須恵器大甕1点・大甕片26点である。この他に、愛宕山古墳の調査に至る金銅製単龍環頭大刀1振を掲載した。この他に、発掘調査時に墳丘から鉄刀(直刀)の一部が出土しているが、残片のため本報告では取り上げなかった。

環頭大刀

本古墳から出土したと伝えられ、保原町中央公民館に収蔵されていた。本古墳調査の契機になった遺物である。後に保存処理が施され、現在は伊達市保原歴史文化資料館で保管されている。発掘調査報告書(高倉 1980)及び福島考古第27号の論考(穴沢・馬目 1986)を参考に観察していく4)。

本刀は金銅製の単龍環頭大刀で、把頭・把筒金具・把縁金具・鞘口金具・刀身・鞘尻金具から構成される。把頭は、金銅製の鋳造品で、直径7.4cm・厚さ1.0cmを測る。環内の龍頭は金色をとどめている。環文は勇大さが失われて平面的な感じのするもので、内側の隆帯部と環文凸部の上部と下部に刻目文が付けられている。環内には口か

ら雲気を吐く龍頭をあらわし、頭の上の三本の冠毛は完全に分離して先端部が蕨手状に丸くなっており、耳の後から後毛が下方に延びて同じく先端が丸くなる。また、雲気も枝状に分かれており、環に癒着するものはない。龍頭にも細かな刻目文が施されている。

この把頭の茎を覆う筒は断面が八角形で、佩表側から2個の目釘孔が貫通している。この孔は、把頭茎には目釘孔が横に3孔並んでおり、中央の孔が二周り大きく、厚さは先端部が薄くなっている。目釘孔の上に切り込みの段があり、縦・横状に削痕が認められる。したがって、左右の孔は筒金と把木とを固定するため、中央の大きな孔は、刀身もしくはそれと把頭をつなぐ継ぎ手とを接続するための役割を推定している。しかし、継ぎ手としての孔が3個、左右が大きいことや接合法を考慮し、さらに作り方や表現方法を観察すると、本環頭大刀は修復が加えられたものと考えられる。

また、筒金具は金銅製で、把は銀線が巻かれており、木質が遺存している5)。把には径1.2mmの刻み目入の銀線を巻き、32巻が残存している6)。銀線にタガネ状の工具を使用し、細かな刻目が観察される。

把縁金具は金銅製で、断面は八角形で把筒金具よりも細く、内部には把木と刀身が遺存している。

刀身は身幅3.0cmほどの平造りで、錆化して剥離が著しく、細身の大刀であったことが推測される。刀身部の残存長は59cmを測る。鞘尻金具は金銅製で、鉄製の目釘が残っている。鞘木に固定したものと推定される。

本単龍環頭大刀が修復された可能性を指摘したが、後に大谷晃二氏より他にもご教示を得た。

①環部と筒金具のアンバランス この環頭大刀が一須賀様式と推定されると、筒金具は刻みを入れた責金具でとめる。しかし、本刀は単純な金銅製筒金具である。

②環頭茎目釘孔が3孔存在する。中央部が当初のもので、左右が拵え直しによるものか。しかし、左右にあげ直し理由が不明。

③環部と中心飾りの龍の目に円文がある。円文は意味不明で、あまり例がない。拵え直しの時に、追刻したものであろうか。

④中心飾りの龍文に文様状の刻みあり、先端がV字状のタガネを使用している。中心の飾りに刻みはあまり使用しないので、拵え直し時に追刻したものであろうか。

⑤柄間の銀線は、再利用したものか。

本金銅製単龍環頭大刀は、修復の可能性が強いことが指摘され、考え方によっては回収したものが、再度下賜されたものとの推測も可能である。

-土師器・須恵器・鉄製品の説明は、割愛した。-

3. まとめ

【金銅製単龍環頭大刀について】

金銅製単龍環頭大刀について、観察する機会に恵まれた。新知見として金銅製単龍環頭大刀は修復された可能性を指摘することができた。このため本金銅製単龍環頭大刀は6世紀中頃に製作され、一度下賜されたものが、修復の後に再度下賜されたものと考えた。このことから、6世紀末頃～7世紀初頭に愛宕山古墳に埋葬された被葬者の手に渡ったものと考えている。

【愛宕山古墳の造営年代について】

愛宕山古墳の造営年代は、古墳の立地や石室の構造・金銅製単龍環頭大刀などから6世紀末頃と推定されてきた。しかし、出土品の土師器杯は、内面に黒色処理が施さ

れ、小型な有段丸底杯の可能性が高い。須恵器甕は大型・小型な甕が含まれており、年代を推定するには困難である。

土師器杯は復元図化したか、ほぼ7世紀初頭と考えられる。また、金銅製単龍環頭大刀は6世紀中頃の製作であるが、後に様々な修復などが行われており、再度下賜された可能性が指摘されている。このことから、愛宕山古墳の造営時期は、7世紀初頭と考えている。

【愛宕山古墳の被葬者について】

愛宕山古墳に埋葬された被葬者については、「金銅製単龍環頭大刀」からヤマト政権と密接な関係のある豪族と指摘されている。ただ、同一古墳群の中でもしばし独立してした阿武隈川や福島盆地を見通せる山地性丘陵の先端に立地している特色がある。旧伊達郡(現在の伊達市・桑折町・国見町を含む)は、福島盆地の北部に位置し、中央を阿武隈川が流れている。阿武隈川は古来からあばれ川として、しばしば流路を大きく変えてきた。そのため、水害で削り取られた古墳もある。この阿武隈川を境にして、西側と東側に古墳群の分布が確認される。西岸には国見町から桑折町に続く高い段丘面に塚野目古墳群や森山・大木戸・沢田古墳群、そして涌谷横穴群の存在が知られている。これに対して、東岸地区に沖積上から丘陵の縁辺部に新山・土橋・高野・星の宮・大塚古墳・大泉みずほ遺跡が知られている。

阿武隈川東岸地帯では、山地性丘陵の先端部に立地する古墳には、伊達市の愛宕山・内山古墳、そして福島市月ノ輪古墳⁷⁾が知られている。愛宕山古墳から金銅製単龍環頭大刀、内山古墳からは蕨手刀、福島市月ノ輪古墳からは頭椎大刀が出土している。鉄製品の装飾付大刀でも、特色あるものが出土している。

このことから、特殊な鉄製品である装飾付大刀の埋葬から、ヤマト政権と密接な関係のある人物が想定されてくる。群集墳と異なり、他の古墳群から独立し、福島盆地や阿武隈川を望む山地性丘陵に単独で立地している。1代限りの被葬者を想定すれば、ヤマト政権や隣接する地域の有力者子弟、及び派遣された軍事関係者の古墳とも考えられないであろうか。

想像の域をでないが、福島盆地内の古墳群や集落遺跡・古代の道など、古墳時代全体を考える資料の数は増えてきている。信夫郡から伊達郡が分かれるなど、生産性の高い地域・有力者がひしめく社会など考え直すべき課題は多い。

註

1) 旧保原町の昭和43(1968)年2月20日発行『町政だより』No.82「郷土の史跡めぐり^⑫」の中に、町史編纂の準備として、山神古墳(柱田)出土の遺物が掲載されている。金銅製単龍環頭大刀と共に出土したかは不明であるが、須恵器フラスコ型壺や銅鏡・耳環などが掲載されている。現在は所在不明である。特に、須恵器フラスコ型長頸瓶は、7世紀頃と推定され、土橋古墳との関連が興味深い。また、昭和52(1977)年5月1日の『広報まぼら』の「町史編さん室便り」の中で、土橋古墳が紹介されている。柱田字土橋の山腹には3~4基の古墳が存在していた。この中で、一番高所に所在する古墳が愛宕山古墳と推定され、昭和40年代に盗掘され直刀が発見されている。この直刀が、金銅製単龍環頭大刀であろう。このほかに、他の古墳から銅鏡や玉類が出土したことが記録されている。

2) 昭和54(1979)年の発掘調査が終わり、報告書作成に際しては、「土橋古墳発掘調査報告書」として刊行されている。その後、小字名から「愛宕山古墳」の遺跡名に変更された。現在の「金銅製単龍環頭大刀」は、保存処理が施され、伊達市歴史文化資料館に保管されている

3) 昭和54(1979)年4月1日・5月1日・6月1日発行の『広報まぼら』の「歴史をたずねて」の中に、発掘調査時の様子が掲載されている。

4) 金銅製単龍環頭大刀は、昭和40年代の出土から平成に入り保存処理が施されている。発見されてから20年以上経過し、一部劣化が認められた。実測・観察の時期により、表現に差異がある。

5) 現在では木質の痕跡は不明瞭になっている。

6) 穴沢・馬目氏が調査した段階では、38 巻確認されている。現在では、銀線の巻きも緩くなり、調査時より少なくなっている。

7) 月ノ輪山 1 号墳を独立した古墳として取り扱った。これは、現状で単独で残っていたこと、昭和 36 年の包蔵地カードに、隣接する古墳（3 基）の位置・規模が不明確、同一地形状（高低差など）に立地していたかなどがある。また、1 号墳の墳上に祠や石塔の存在から、愛宕神社の奥の院として、古来から特殊な地としての認識があったものと考えられる。



図1 愛宕山古墳・土橋古墳位置図

表1 出土遺物点数表

出土地点	出土位置	縄文土器	土師器		須恵器 大壺・壺・不明	土師質土器 杯	鉄製品
			杯	壺			
A地点	墳丘西側	—	—	—	11	—	—
B地点	墳丘北側	—	—	—	115	—	—
C地点	墳丘南側	—	—	—	85	—	—
D地点	墳丘東側	—	—	—	2	0	—
E地点	西側周溝	—	—	—	30	1	—
F地点	北側周溝	—	2	1	202	—	—
G地点	東側周溝	—	17	—	12	—	1
石室	—	2	4	1	24	—	1
その他	不明	—	1	—	88	1	—

* 小片を全て1点として集計

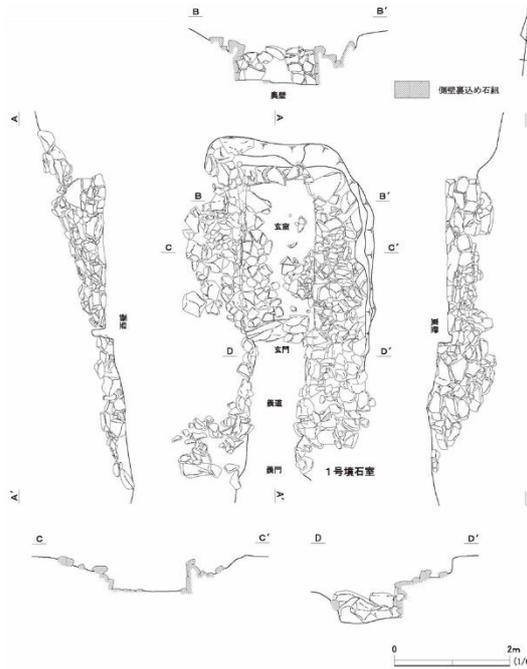


図4 1号墳石室

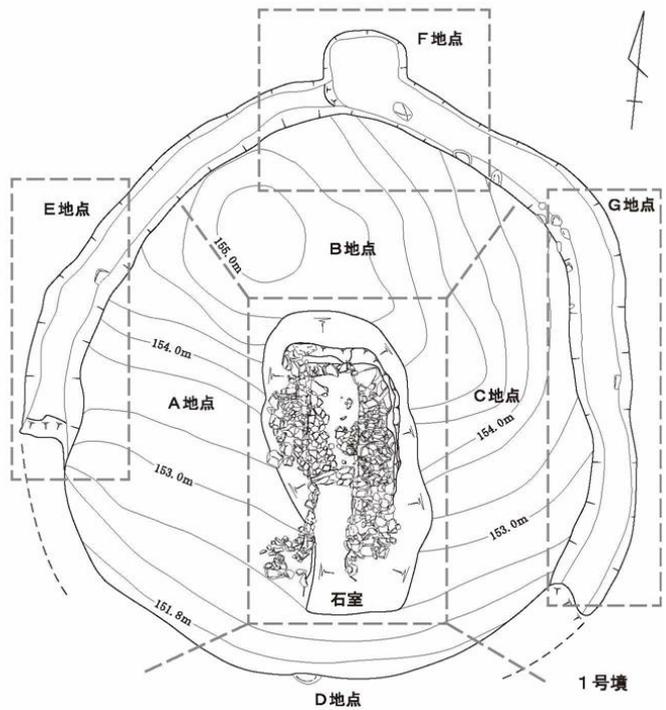


図5 遺物出土地点

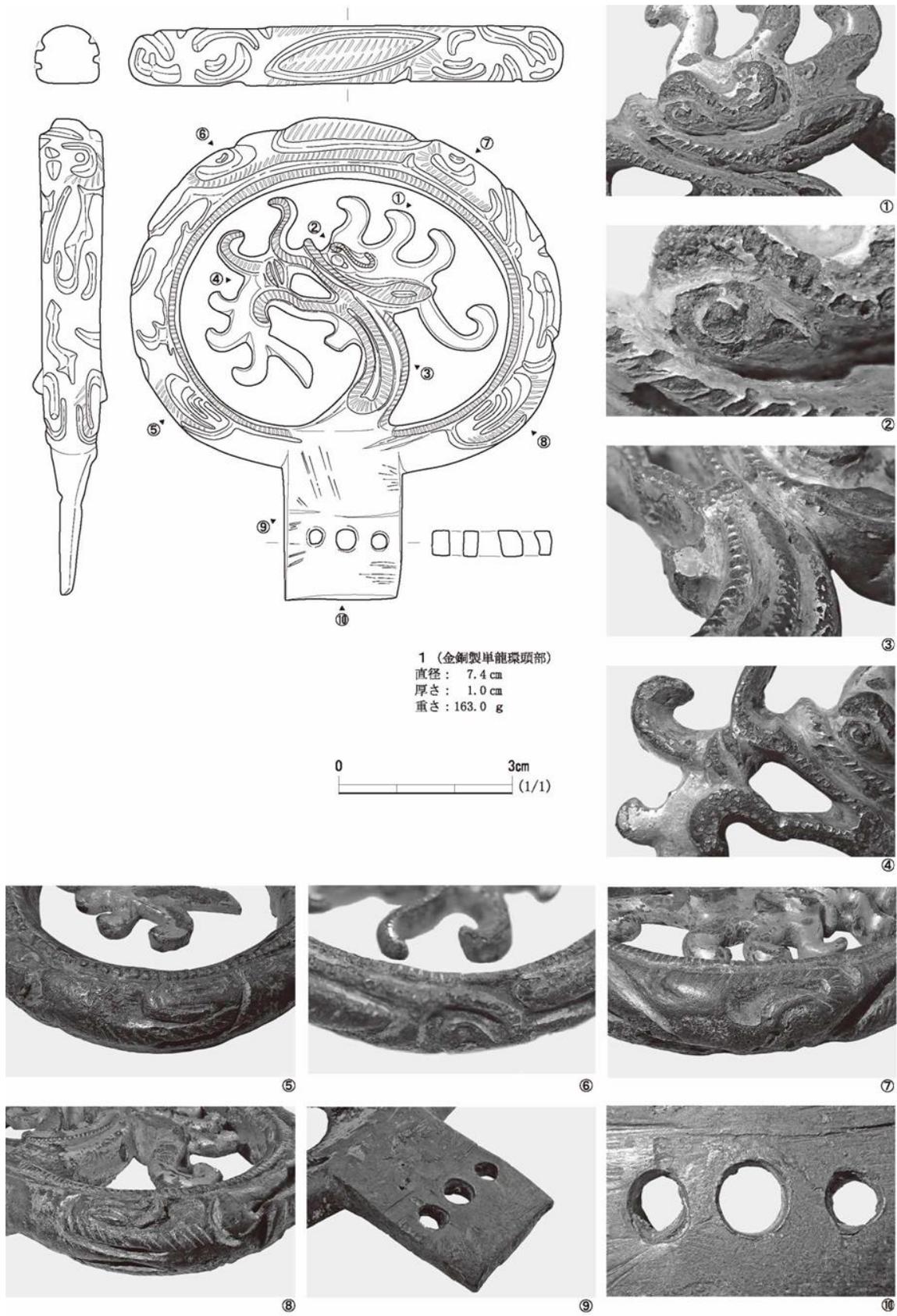


图6 1号墳出土単龍環頭部

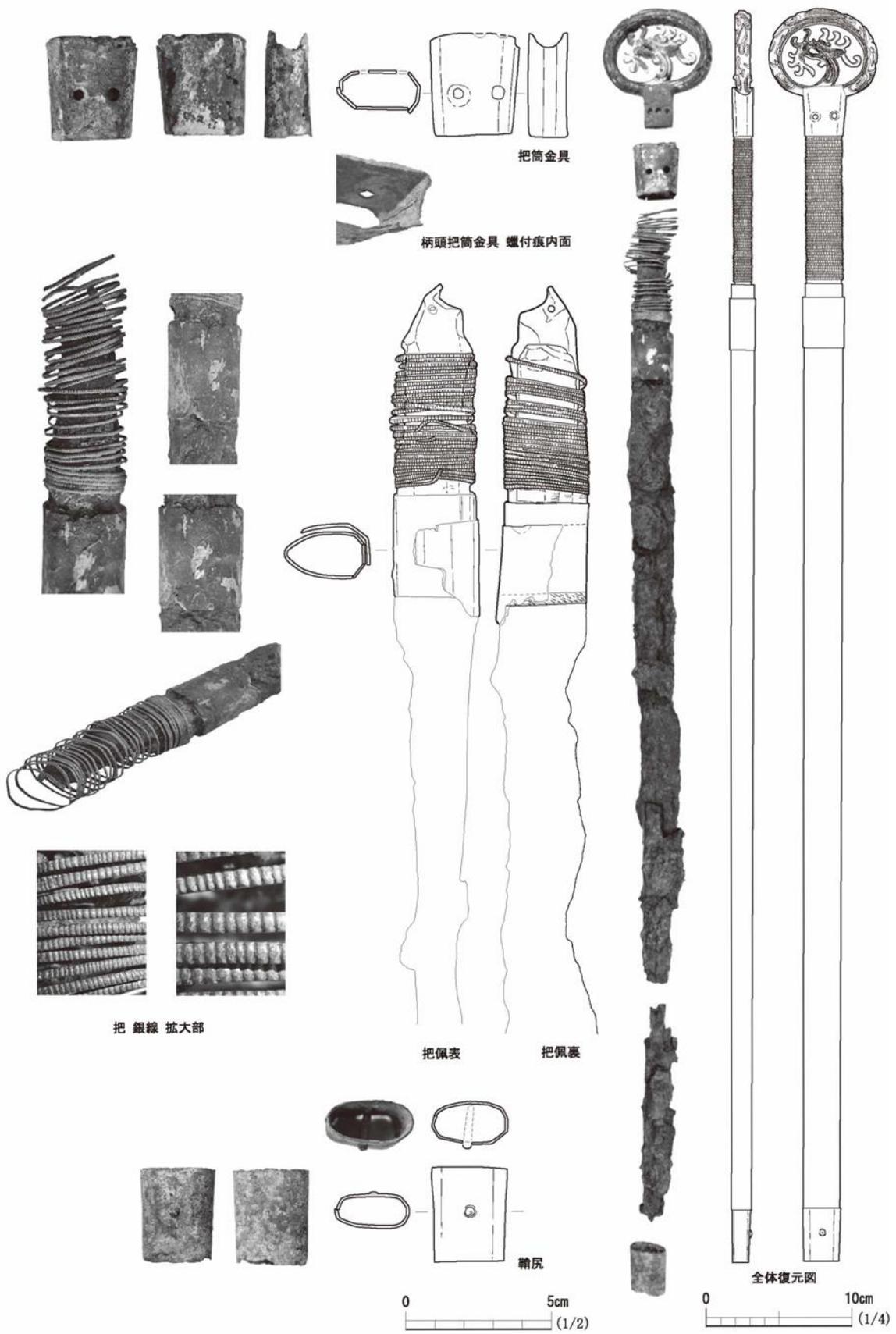


图7 1号墳出土金銅製單龍環頭大刀